

2013年度 立教SFR国際会議助成成果報告書 (A, B, C)

1. 会議概要

会議名	和文	二重の異文化としての中世 (立教大学ドイツ文学専攻創立50周年記念)		
	欧文	Fremde Mittelalter - Die Fremde im Mittelalter: Xenologische Hermeneutik (Zur Feier des 50jährigen Jubiläums der Germanistik an der Rikkyo Univ.)		
主催	立教大学ドイツ文学専修			
共催	立教大学ドイツ文学会			
後援				
開催責任者	所属 氏名	文学部 井出万秀	印	
運営事務局	事務担当者 氏名	由比俊行		
開催期間	2013年 6月 22日 から 2013年 6月 23日まで			
開催場所	立教大学池袋キャンパス太刀川記念館			
参加者数※1	学内 学外	国内から招聘 海外から招聘	13名 6名 7名	5カ国 合計 26名 6カ国
公開講演会等 参加者数※2	①	2013年 6月 22日	併せてのべ85名	
	②	2013年 6月 23日	外国から18名 (出身国は記載なし)	
開催日程		午前	午後	夜
	第1日 6/21 月 日		受付	打ち合わせ
	第2日 6/22 月 日	研究発表	研究発表	レセプション
	第3日 6/23 月 日	研究発表	研究発表	懇親会
開催経費総額	予算額	2,892,013 円	執行額	2,384,404 円

※1 参加者とは、会議において講演、パネラー、コメンテーター等の活動を伴う者をいう。

※2 一般に公開された講演会等に聴講のために参加した者。講演者、パネラー等は除く。参加者名簿を添付すること。

2. 開催趣旨概要

立教大学ドイツ文学専攻創立 50 周年を記念し、文学・文化研究の中でも最も長い研究史を有する中世研究を現代的な文化圏横断的に新たな視点から捉え直すことを目的として国際会議を企画した。日本においてもドイツにおいても自国の中世研究は文学や歴史研究において確立された研究領域であり、この伝統は 19 世紀半ばにまで遡る。しかし我々現代の日本人にとっても、日本の中世は未知の世界であり、一種の「異文化」である。この事情はドイツも同様である。研究対象が直接眼前にはないこと、社会や文化があまりにも現在とはかけ離れていることがその原因だと思われる。ドイツでも、現代のドイツ人にとって中世は異文化なのである。自国の文化にとっても異文化である中世を外国の中世について研究することは、地理的にも時間的にも隔たりのある、まさに「二重」の異文化である。このような二重の異文化を外国で研究する・教育することは可能なのであろうか、意義のあることなのであろうか、という問題提起とそれに対する回答が今回の国際会議開催の目的である。

3. 国際会議の成果概要・今後の展望等

日本の日本中世研究者（文学、歴史、文化）、ドイツの日本中世研究者、ドイツ・オーストリアのドイツ中世研究者、ドイツ語圏以外（日本、韓国、スペイン、アメリカ合衆国）のドイツ中世研究者らを発表者として招待し、それぞれの場での中世研究の動向や潜在性について、発表しあった。ドイツ語と日本語の 2 言語で行われたが、発表原稿を対訳として配布することで、会議参加者・訪問者の誰もが発表を理解できるように配慮し、質疑応答は通訳を介し、円滑な意思疎通を実現することができた。日本でもドイツでも、古典と呼ばれる時代に続く時代は文学的に不作為であるとされるが、その背景にはいずれの地域でも、古くからの研究伝統が関与しており、研究パラダイムの問題であることが確認された。従来の研究ではカノンとされない作品や資料から中世同時代の新たな諸相を浮かび上がらせることが中世研究の将来的に重要な課題のひとつであると言える。中世にはそれ以前から「古典」とされる多くの作品が伝承され、数多くの写本が残されているが、従来は原典に近いものほど価値があるとされた。しかし、伝承は改編を伴うものであり、まさに何がどう改編されたかに中世の文化・価値観を窺い知ることができる。「中世神話」ともいふべき、新しい神話群がどう形成されたのか、その背後にはどのような思想や価値観があったのか、江戸時代初期の作とされる「幻の源氏物語絵巻」は誰がどのような意図で作成させたのか、などの問題提起が可能である。カノンとされるべき作品はないものの、活発な文化活動が行われていたことは事実であり、古典カノンとの比較で中世を不毛の時代ととらえるのではなく、「叢生」の時代として捉えることの重要性と意義が確認された。個々の発表のテーマも、伝統的な文学研究におけるように、美的価値を論じるのではなく、身体性、物質文化、音楽性、写本文化、心理、異文化体験、大衆性、など、人間存在に普遍的に関わるトピックから中世にアプローチすることにより、言語の壁、時代の隔たり、地域の隔たりを超えて対照研究が十分に可能であり、将来性を持つことが共通して認識された。多くの発表は文学を素材として扱うものであったが、中世研究においてはかなり学際性が浸透していることが確認できた。今後は、今回の国際会議の発表原稿をドイツ語で論集として出版する予定である。国境を越えて中世研究がもつ普遍的な潜在性、中世研究の将来への展望、さまざまな問題提起の可能性、といった観点から、この論集は先導的なモデルとなり得る貴重な成果である。特に日本の中世研究に関する論文がドイツ語で発表されることは極めて稀であるため、日本からの情報発信としてドイツの日本研究者のみならず、ドイツのドイツ中世研究者にとっても刺激となることが大いに期待される。

4. 会議の構成

(1) 学内参加者

氏名	所属・職名	会議における活動	内 訳
井出万秀	文学部・教授	開催責任者・司会	文学 10名
前田良三	文学部・教授	司会	異文化コミュニケーション 2名
副島博彦	文学部・教授	事務局	その他(ランゲージセンター)
小嶋菜温子	文学部・教授	研究報告	1名
蔵持重裕	文学部・教授	研究報告	
坂本貴志	文学部・教授	司会	
太田浩司	文学部・助教	司会	
小野あさよ	文学部・助教	事務局	
Thomas Schwarz	文学部・助教	司会	
由比俊行	ランゲージセンター教育講師	事務局責任者	
浜崎桂子	異文化コミ・准教授	司会	
新野守広	異文化コミ・教授	事務局	
吉橋さやか	日本文化研究所	研究報告	
			計 13名
変更内容(氏名、不参加/追加の別)			

(2) 学外参加者(国内、国外)

氏名	国名・所属・職名	会議における活動	内 訳
小峯和明	日本・立教大学名誉教授予定	基調講演	国名 人数
佐倉由泰	日本・東北大学教授	研究報告	日本 6名
香田良樹	日本・慶応大学教授	研究報告	スペイン 1名
磯部美穂	日本・信州大学准教授	司会	オーストリア 1名
村瀬天出夫	日本・聖学院大学兼任講師	通訳	韓国 1名
林志津恵	日本・北里大学准教授	司会	ドイツ 3名
Albrecht Classen	USA, アリゾナ大学教授	基調講演	アメリカ合衆国 1名
Max Siller	オーストリア・インスブルック大学教授	研究報告	
Eva Parra-Membrives	スペイン・セヴィリア大学教授	研究報告	
Günther Rohr	韓国・チュンアン大学講師	研究報告	
Jörg Quenzer	ドイツ・ハンブルク大学教授	研究報告	
Elke Brüggem	ドイツ・ボン大学教授	研究報告	
Robert Horres	ドイツ・デュッセルドルフ大学教授	研究報告	
			計 6カ国 13名
変更内容(氏名、不参加/追加の別)			
不参加: Dieter Trauden(日本・京都大学講師)			
変更: 吉田治代(新潟大学准教授)→磯部美穂(信州大学准教授), Klaus Antoni(ドイツ・デュッセルドルフ大学教授)→Robert Horres(ドイツ・デュッセルドルフ大学教授), Stephan Köhn(ドイツ・ライプツィヒ大学講師)→Jörg Quenzer(ドイツ・ハンブルク大学教授)			
追加: 林志津恵(北里大学准教授)			